転生少女、運の良さだけで生き抜きます！

足助右禄
Urroku Asuke

RB
レジーナ文庫

登場人物紹介
ダキア
先輩冒険者。
厳つくて恐い
大男だけど、
ミナを気にかけて
くれている。
アリソン
先輩冒険者。
いつも
ニコニコした
お姉さん。
クロウ
クラン《黒鉄の刃》のリーダー。
ミナの幸運に
頼りたい事情が
あるようで……？
ユキ
ミナが異世界で
出会った少女。
冒険者達に
白銀の君と
呼ばれている。
イクス
ギルドの職員。
穏やかで
優しいお兄さん。
ルーティア
見た目は
エルフの幼女だが
実は有能で強い
ギルドマスター。
ミナ
女神様によって異世界に
転生させられた
元日本人の女子高生。
いつも前向きな、
とんでもない
幸運の持ち主。

目次

転生少女、運の良さだけで生き抜きます！　7
書き下ろし番外編
彼女がもたらすもの　375

転生少女、運の良さだけで生き抜きます！

1　転生

気がつくと真っ白な部屋にいた。ここはどこだろう？　本当に何もない白一色の部屋。いや、よく見れば壁はない。空間と言うのが正しいのだろう。

そんな事より私はどうなっちゃったの？　記憶を辿ってみる。

私は佐伯美奈。十五歳の高校一年生で、お祖母ちゃんが入院している病院へお見舞いに行って――

「えっと、何があったんだっけ？」

「残念ながら貴女は死んでしまいました」

突然声がした。周りを見回しても人はいない。

「私はここです」

そう聞こえてすぐ私の目の前に女性が現れる。長いブロンドヘアで真っ白なローブみたいなものを着た二十歳くらいの美女。ハリウッド女優のような人だ。

「すっごい美人さんだー」

「ふふ。ありがとうございます」

現れた美人さんは神様で、私が災害に巻き込まれて十五歳の若さで命を落とした事、その際に勇気ある行動でその場にいた沢山の人を救ったため、地球ではない他の世界に転生させてもらえる事――その世界は剣と魔法のファンタジー世界で、死の直前の記憶がないのは後悔を残さないための措置である事を教えてくれた。

「まず体を創造しましょう」

女神様がそう言って手をかざすと、私の体が整えられていく。

「生前の貴女の体を真似て創りました。転生先の世界では髪の色が黒だと目立ちますので茶色に、目の色も比較的多い茶色にしました。他に要望はありますか？」

生前よりも身長は少し低いが、体型がかなりスリムになっている。足も長く、日本人の体型ではないようだ。髪はショートボブで艶やかだった。

「凄く可愛くなってる！　こんなに良くしてもらったら要望なんてありませんよ！」

「ふふ、欲のない方ですね。では容姿はこのように。皆に好かれるおまじないもしておきましょう」

女神様の手からキラキラと光がこぼれ落ち、私の体に入っていく。

「さて、次はステータスです。貴女はこれから一人で生きていくのですから強くしておきましょう」
「え、いらないですよ」
「はい？」
「強くしていただかなくて大丈夫です。普通にしてください」
「しかし、これから行く世界は貴女が元いた世界よりも文明が発達していなくて、魔物も住んでいます。危険なのですよ」
心配そうに首を傾げる女神様。
「こんなに良くしてもらったら十分ですよ。あ、でも何もわからないのも不安なので、読み書きと、その世界の常識くらいは教えてほしいです」
「そちらは初めから備えておきますのでご安心ください。あと、一人になっても大丈夫なように最低限のお金や衣服、装備などもご用意させていただきますね」
「何から何までありがとうございます」
「他に何かありませんか？」
優しく微笑みながら女神様が聞いてくる。何かお願いした方がいいんだよね。
「んーそうですねぇ、じゃあ運を良くしてください。私、昔からツイてないってよく言

われていて。ダメでしょうか？」
「勿論大丈夫です。しかし、本当に欲のない方ですね」
「せっかく異世界に転生させてもらえるなら地道に生きるのもいいかなって思いまして。あ……」
「どうしました？」
「要望になっちゃうのかな？　生前の私の家族がいると思うのですが、私が死んじゃった事で悲しんでいたりしないかな～って」
「わかりました。貴女を失った悲しみを少しでも和らげられるように私が見守っておきましょう」
「ありがとうございます！」
「それでは地上に転送します。ようこそ新しい世界――アスティアへ。女神アウレリアは貴女を歓迎します」
女神様がそう言って手をかざすと、周りが光に包まれて私の意識は遠のいていった。
光が溢れ、大きな音がした。鳥のさえずる声。馬の蹄の軽快な音。車輪の音。そして緑の匂い。目を開けるとそこには森が広がっていた。舗装されてない道が左右に伸びて

いる。私は木陰に座っていた。

「本当に来たんだ！　異世界！」

澄んだ空気が気持ちいい！　っと、浮かれている場合じゃないよね。まずは状況確認を。

わっ、なんか目の前にステータスみたいなのが出た！　そこには名前、性別、種族、年齢、職業と自分の身体能力が数値化されたものが表示されている。一つずつ確認していこう。

名前はミナになっている。名字はない。この世界では名字がないのが普通なのかな？

［名字を持つのは貴族や名家の者に限られます］

頭の中に声が響く。何だろう？

［私はミナをサポートするための機能です。ステータスの中にギフトという項目がありまして、そこにヘルプ機能というものがあります。それが私です］

そうなんだ！　わからない事を教えてくれる機能なんだね！　ありがとう女神様！

では確認の続きを。種族は人間、性別は女と。年齢は十三歳になっている。少し若くなっているけど何でだろう？

日本人は海外の人に比べて若く見えるから、見た目で調整されたのかな？

ヘルプさんに聞いたら、この世界の成人は大体十五歳らしい。職業は今のところなしだし、成人で無職はイタいと思われるだろうという女神様の配慮かも。優しいなぁ。

早く何か仕事を見つけないといけない。十三歳で身元がわからない私が就ける仕事ってあるのかな？　普通に考えたら街の中でアルバイトみたいな仕事から始めるべき？

将来の夢とか考えたのは、つい最近だったっけ。お祖母ちゃんが入院して、その時に看護師さんが凄く親切で丁寧だったのを見て、私も人を支えられる職業に就きたいと思っていた。特に医療系の職業を意識して救命講習とか受けてみたりもした。でもこの世界の医療と地球の医療では形態も違うだろうし、この際だからこの世界にしかない職業に就いてみたい。

そんな事を考えていたら、この世界の一般的な職業が羅列された。流石は剣と魔法のファンタジー世界。冒険者という職業があった。依頼を受けて困っている人のために働いたりするらしい。よし！　冒険者になってみよう！　これなら自分の力だけでやっていけるだろうから、家柄とか関係ないよね。

そうと決めたら確認を続けよう。レベルは一。

続いてステータス。まずは――筋力、耐久力、敏捷、知力、幸運、魅力の六項目。筋力から知力までは全て十二、魅力は高くて六十。幸運がなんか凄い事になっていた。

百と書いてある横にカッコがついていて、その中は六万五千五百三十五になっている。カッコ内が本当の数値で、女神様が秘匿してくれているそう。

生命力、精神力、気力以外は百が上限らしい。都度ヘルプさんが教えてくれた。超便利！

私の生命力は十二、精神力が八、気力が十。生命力はダメージを受けると減っていって、零になると死んでしまうらしく、精神力は魔法を使うと消費して、零になると気絶。気力は武技という必殺技みたいなものを使うと消費して、零になると気絶する。実際、どれだけの痛みが数値上いくらのダメージになるかよくわからない。精神力と気力に至っては地球で消費のしようのないものだから尚更だ。まあそれは追々わかるようになればいい事かな。

あとはギフトの項目。私が持っているギフトは鑑定、アイテムボックス（インベントリ）、ヘルプ機能となっている。鑑定は今、自分のステータスを見るために使用している技能らしい。アイテムボックスっていうのはあれだよね。別の空間に物をしまっておけるという便利技能だ。カッコ内のインベントリはその上位互換で、アイテムボックスに重量制限とか時間経過が一切ないのだとか。凄いギフトをありがとう、女神様！　っと、脱線しちゃった。

次は装備の確認だよね。ショートソードは攻撃力が七で秘匿効果に非破壊属性、重量軽減、所持者固定と書いてある。

レザーブレストアーマーは防御力が三で秘匿効果に非破壊属性、重量軽減、所持者固

定、自動調整と書いてあった。壊れないの？　凄くない？　重量軽減は所持者以外には作動しないみたい。

自動調整はサイズの事らしい。育ち盛りだもんね。……育つよね？

秘匿効果がついていると、他人に鑑定されても普通の装備に見えるようになるのだとか。

服装は七分袖のシャツにショートパンツ、ニーハイのソックスにブーツで、背中に小さなバックパック。中には何かの革で出来た水筒に硬く焼いたパンと干し肉、着替えの服に下着にタオル、あと石鹸も入っている。インベントリ内にお金も発見した。ええと、いちじゅうひゃく――

一億レクス？　えっと、通貨の価値は円とほぼ同じ？　貰いすぎじゃないかな？

ま、まあ初めは使わせてもらうとして、なるべく自分で稼いだお金を使うようにしよう。

「さてさて、まずは街に行ってみようかな」

左の方を見ると、遠くに壁みたいなものが見える。あそこが街かな？

早速行ってみよう！　体は軽く、とても歩きやすい。森の中を真っすぐ伸びる道を、壁に向かって胸を弾ませて歩いた。

「着いたー！」

歩き始めて三十分、ようやく壁の前に着いた。恐らくこの内側が街なんだろう。近くには大きな木の門があり、警備の人が何人も立っていた。どうやら一人ずつ調べられるらしい。

馬車で来ている人は積荷の確認までされている。とりあえず審査の列に並んでみた。

「次！　なんだ、お嬢ちゃん一人か？」

「は、はい！　えっと、冒険者になりに来ました！」

イカつい顔のおじさんだ。ちょっと怖いかも。

「一応荷物のチェックを。身分証はあるか？」

「ないです。ないと街に入れないのですか？」

「いや、仮証を発行するから大丈夫だ。発行に千レクスかかるがいいか？」

リュックの中を確認しながら聞いてくるおじさん。まあ、チラ見程度なんだけど。

「お金はあります！　お願いします！」

「わかった。この仮証は七日間しか使えない。期限が切れると、街にいる場合は逮捕されて罰金を支払うまで解放されないんだ。支払いが不可能だと判断された場合は奴隷に落とされる。気をつけるように」

そんな事で奴隷にされちゃうんだ。奴隷って現代の日本じゃ考えられないけど、無給で労働させられるんだよね？　気をつけよう。

おじさんは一通りの説明をすると名刺サイズの銅板をくれた。こちらの言語で仮証と刻まれていて、日付も記載されている。

「ありがとうございます！」

「おう、気をつけてな。冒険者登録をすれば身分証が発行される。そしたら、いつでもいいから仮証を返しに来るんだぞ」

ぺこりと頭を下げたらゴツゴツした手で頭を撫でられた。顔は怖いけど、いい人なんだね。

「はい！」と返事をしてニッコリ微笑むと、イカつい顔が少しだけ緩む。

そういうわけで私は無事に街に入る事が出来た。

門をくぐるとそこはヨーロッパ風の街並みが広がっていた。

石畳の大通りにレンガ造りの建物や木造の建物が、区画に沿って綺麗に並んでいる。もっと地味な建物が多いのだろうと想像していたのだけど、屋根の色も赤や青、黄色とカラフルだ。大通りは人と荷馬車などの往来が激しく、賑やかさに驚かされた。

また、大通りにはいろんなところに屋台のようなお店があり、香ばしい匂いもしている。ついつい屋台に寄ってしまう。

「らっしゃい！　フォレストボアの串焼きだよ！　一本百レクス、美味しいよ！」

「一本ください！」

「あいよ！」

人懐っこい笑顔のおじさんから串焼きを貰い、ポケットからお金を出すフリをしてインベントリのお金を出す。ついでに冒険者ギルドの場所も聞いておいた。

受け取ったアツアツの串焼きを食べながらギルドの方へ向かう。串焼きはかなり大きくて食べ応えは抜群！　タレが甘辛くてとっても美味しかった！　串はポイ捨てしちゃいけないのでコッソリとインベントリにしまっておいた。

「ここかな？」

大通りから少し入ったところにその建物はあった。両開きの頑丈そうなドアは開け放たれていて、まだお昼なのに入る前からお酒くさい。

中を覗くと、入ってすぐの場所は酒場のようになっていて、男の人四人がテーブルを囲んで酒を飲んでいた。

年季の入った革の鎧を着て、剣や槍などの武器が側に立てかけてある。あの人達、冒険者だよね？

他のテーブルでは男の人二人、女の人二人で食事をとっている。こちらも金属の鎧やローブを着込んだ冒険者風だ。いかにも冒険者の溜まり場って感じ！　なんかワクワクしてきた！

奥にはカウンターがあり、受付の人が四人。それぞれの前に列が出来ている。あそこで冒険者登録をしてくれるのかな？　とりあえず並んでみる。

「こんにちは！　冒険者になりたいんですけど」

私の番になった。カウンターは結構高くて、私の肩くらいまであって話し難い。子供だと冒険者になれないかもと不安で、手をカウンターにかけてちょっと背伸びをしながら話をする。

「いらっしゃい。お嬢さんが冒険者になりたいのかい？」

受付は金髪の優しそうなお兄さんだった。穏やかに微笑んで応対してくれる。

「はい！　ダメ、ですか？」

「大丈夫だよ。冒険者登録に年齢制限はないからね。手続きをするけど字は書けるかな？」

「大丈夫です」

優しく受け答えしてくれたお兄さんが、登録用紙をカウンターに置く。
ペンを取って名前、年齢など必要事項を書き込んだ。
「最後にステータスの確認だよ」
平べったいツルツルの石板がカウンターに置かれた。手を乗せればいいらしい。
手を置くと、ステータスが表示される。
「幸運、百!?」
お兄さんが声を上げ、フロアにいるほぼ全員がこちらを見た。うわぁ、視線が痛い。
「し、失礼」
お兄さんが咳払いをしてそう告げると、こちらに集まっていた視線が戻っていく。
「ごめんごめん。それに、鑑定にアイテムボックスのギフト持ちか、凄いな」
お兄さんは息を呑んだ後、驚いたように言う。私が首を傾げていると説明してくれた。
「いいかい、鑑定もアイテムボックスも重宝(ちょうほう)される能力なんだ。二つとも持っているのはとても珍しい。あまり口外しない方がいいね。でも、それを公表してお金を稼(かせ)ぐ事も出来る」
私は普通に冒険者生活をしたいので、「内緒にしておいてください」と伝えておく。
「わかった。もしも君の能力が原因でトラブルに巻き込まれたら、冒険者ギルドが守っ

てあげるからね。すぐここに来るんだよ」
「ありがとうございます！」
出会う人が優しい人ばかりで涙が出そうだよ。
ほどなくして、街の入り口で渡されたものとほぼ同じ銅板を渡された。
「これが冒険者の証だよ。街に入る時の身分証になる。再発行には一万レクスかかるから、なくさないようにね。端っこに空いている穴に紐を通して首にかけておくといいよ」
銅板にはエリスト冒険者ギルド所属と書かれており、私の名前と性別、年齢が記載されている。
「改めてようこそ、エリスト冒険者ギルドへ。今日から君も一員だよ。ヨロシクね」
「はい！　よろしくお願いします！」
カウンター越しに握手を交わした。お兄さんは身を乗り出して私が握手しやすいように気を遣ってくれている。気配りの出来る優しい人だ。
「冒険者について説明を受けるかい？」
「いえ、大丈夫です！」
ヘルプさんに頼っちゃおう。
えーと、冒険者は下から、銅、鉄、銀、白銀、金、白金、ミスリル、オリハルコンと

いうランクに分かれていて、ギルドへの貢献度によって昇格があり、一年間仕事をしなければ冒険者登録を抹消される。ランクはアルファベットでも表す事があり、オリハルコンはS、ミスリルから順番にA～Gになっている。つまり私はGランク冒険者という事だ。
「宿は決まっているのかな？」
「今日街に来たばかりなので、まだなんですよ。どこかオススメはありますか？」
お兄さんは大通りにほど近い、そこそこの安さの宿屋を紹介してくれた。
女性も多く利用する信用出来るところらしい。
「依頼はそこの壁に貼り出してあるからね」
「ありがとうございます！　早速見てきますね」
ぺこりとお辞儀をして依頼を見に行く。
結構人がいて、私も見られるようになるまでは時間がかかりそうだ。まぁ、急いでいるわけじゃないし全然いいんだけど、周りの視線が痛い気がする。場違いなのかな？ちょっと居心地が悪い。
前の人が退いてくれたので気を取り直して依頼書を見る。
えーと、Gランク冒険者の受けられる依頼は、森にいるスライムの討伐と薬草の採取

だ。どちらも常設依頼で、持ってきた分だけ買い取ってくれるそう。

スライムはコアがあるのでそれを持ってくればいいとか。宿を確保したら早速やってみよう！

他に掲示されているのはパーティ募集にクラン募集？　パーティは一緒に仕事を受けたりするチームの事で、私みたいに知り合いのいない人はこういうところに自分の事を書いて声をかけてもらったり、人員募集をかけているパーティに売り込んだりするものらしい。まあ、初めのうちは簡単な仕事しか受けられないだろうし、パーティの事は仕事に慣れてから考えようかな。

クランは……どういうものかわからないけれど、一応見ておく。そこには色々な名前が書いてあった。赤炎の竜、白銀の翼、黒鉄の刃に無敵踏破団？

何というかネーミングセンスが……剣と魔法の世界っぽい名前、かな？

「あれ？　お前、黒鉄の刃に入ったんじゃねえの？」

すぐ側に立っていた冒険者二人が話し始める。

「ああ、辞めたよ。最大手だから入るのも大変だったんだけどよ、最近は同じダンジョンに籠りっぱなしでな。それがもうハードなんだわ。そのせいで団員も入れ替わりが激しいからある程度の実力があれば、入るだけなら出来るぜ？　使い潰されるのがオチだけどな」

クランの方針によって色々なのかな？　何にせよクランにもまだ興味はない。そもそも駆け出しなんだし、私には関係のない話かな。

「おい」

ん？　後ろから声をかけられた？　知り合いがいるわけないし……

「聞いてるのか？　お前だよ、そこの」

振り返ると筋骨隆々の大男が立っていた。使い込まれた革の鎧に巨大な剣を背負っている。くすんだ短めの金髪の彼の、茶色の瞳が私を睨みつけていた。体中の傷跡で歴戦の戦士だとわかる。

迫力ありすぎ。怖いよ……

「ひゃいっ！」

うわぁ噛んじゃった。でも仕方ないじゃん、威圧感半端ないんだよ。

「新入りだな？　スライム退治でもやるのか？」

「は、はい。とりあえずやってみようかと」

「お前、スライムってヤツをどんだけ知ってるんだ？」

「えっ、子供の頃にかなりやっつけていますよ」

こうお城の周りをぐるぐる回って、青いタマネギ型の半笑いの物体をね。ゲームでだけど。

「んなわけあるか！　そもそもお前、今も子供だろうが！」

ええ……何で怒るの？

「あー、ダキアが女の子を苛めてる～」

大男の横から現れたのは茶色の長い髪のお姉さんだった。革の軽鎧に、腰には短剣が二本。この人も冒険者なんだろう。この怖いおじさ――お兄さんと知り合いなんだね。

「お、俺は新入りが何も知らずに無茶しそうだったからアドバイスをだな」

「えーでもこの子、完全に怯えてるんだけどー？」

えっ？　新人苛めかと思っていたんだけど、まさかいい人だったの？

「怖がらせてごめんねー。私はアリソン。このゴツくて怖いおじさんがダキアね」

「誰がおじさんだ！　俺はまだ二十八だ！」

まさかの二十代⁉

「ミナです。今日冒険者になりました。よろしくお願いします」

お辞儀をするとニコニコ顔のアリソンさんに頭を撫でられた。うーん、やっぱり子供扱いだね。

アリソンさんはダキアさんとよく一緒に仕事をしているそうで、彼女曰く、ダキアさんは私の事を本当に心配して声をかけてくれたらしい。嬉しいんだけど、そんな怖い顔で見下ろされたら怯えちゃいますよ、普通。アリソンさんとダキアさんはスライムの討伐の仕方を教えてくれた。

コアはスライムの体内で動き回っていて、何回も攻撃をしないと当たらず、武器の消耗が激しいらしい。あと、くれぐれも直接触らないようにと。すぐに溶かされる事は流石にないが、火傷みたいに皮膚が爛れるそう。強い酸みたいな感じかな？　気をつけよう。

「っつーわけだ。初日から無理するんじゃねぇぞ」

「わかりました。ありがとうございます！」

「頑張ってねー」

ダキアさんとアリソンさんにお礼を言ってギルドを後にする。次は宿の確保だ。受付のお兄さんに教えてもらった宿屋、穴熊亭に向かう。大通りから少し入ったところにある、そんなに大きくない隠れ家的な宿屋だった。

「すみません、一人なんですけど空いていますか？」

「いらっしゃい！　空いてるよ！　朝晩食事付きで一泊三千レクス。料金は前払い、食

事が不要なら一食につき五百レクス割引だ」
「じゃあ、とりあえず一週間お願いします。食事は全部ここで食べますね」
元気よく出てきた大柄なおじさんにそう言いながら、二万千レクスを支払う。
「嬢ちゃん小さいのに勘定が速いな！　助かる！」
おじさんは計算が苦手らしい。この世界では文字の読み書きや簡単な計算も学べない人が多いみたいだ。穴熊亭はおじさんと奥さんで経営していて、奥さんは仕入れに出ていて留守だとか。いつもはお客さんの相手は奥さんがするみたいで、おじさんは主に調理担当。
部屋は四人部屋が二つ、二人部屋が四つ、一人部屋が二つあり、一階は食堂兼酒場、二階は四人部屋二つに二人部屋二つ、三階に二人部屋二つに一人部屋二つプラス物置。
私は三階の一番奥の部屋だった。
「出かける時は荷物を置いていって構わないが、大事なものは持ち歩いてくれ。万一なくなったりしたら責任が取れないからな」
まあそうだよね。と言っても、置いておくような大きな荷物はないんだけど。
「見たところ駆け出しの冒険者ってところか？　もし森で狩りをするなら、動物の肉や食べられるキノコを買い取るから持ってきてくれよ」

「わかりました。でもホント駆け出しなので、あまり期待しないでくださいね」
あははと愛想笑いをしつつ話しておく。すると「わかってる、無理はしないで無事に帰ってこいよ」とニコニコしながら頭をポンポンされた。
さて、宿の確保は出来たし、まだ夕暮れまでは時間がある。少しだけ近くの森の様子でも見に行こう。宿を出て門で衛兵のおじさんに会って、仮の身分証を返してお礼を言い、いざ森の中へ。
森と聞いて木々が鬱蒼と生い茂る、薄暗い場所を想像していたけど、そんな事はなかった。
木は疎らに生えていて草もそんなに長くない。小学生が遠足で来ても大丈夫そうなくらい穏やかだ。こんなところにスライムなんているのかな？　キョロキョロと周りを見回しつつ歩いてみる。
五十メートルくらい先に水溜まりのようなものが見えた。あれかな？　少しずつだけど移動している。コアがあって直に触ると危ないと言われた時点で、もしかしてと思っていたが、私がよくゲームでやっつけていたスライムとは違った。
まあそうだよね。タマネギ型で愛嬌のある顔なんてついてないよね。
近くで様子を見ると、地面の草を体に取り込みつつ移動している。取り込まれた草は

溶けて消えていく。それを繰り返しているうちに心なしか大きくなった気がする。
なるほど、そうやって成長するんだ。
スライムは私の方にゆっくりと向かってくるものの、何せ動きが遅い。飛びかかってくるかもと身構えたけど、それもなさそう。確かにこれなら初心者でもやっつけられるね。
次にコアを見ると、野球のボールくらいの丸いものが体の中を少しずつ移動している。
コアが目の役割をしているのかと思い、間近で手を振ってみたり周りを移動してみたりしたけど、コアは私の動きに合わせて動いたりはしない。どうやって私についてきているのかな。目も耳もなさそうだから振動かな？　試しに足を止めて近くにあった石を反対の方へ投げてみる。
スライムが石の落ちた方へ進行方向を変えた。正解みたいだ。もしもの時の対処法が出来た。使う場面があるかはわからないけど、備えあれば憂いなしだね。
さてさて、それではスライムをやっつけてみよう。
ショートソードを抜いてみたものの、武器のダメージについて思い出し、攻撃するのをやめる。
非破壊属性がついているから壊れる心配はないのだけど、かえってそれが問題だ。スライム退治後なのに傷一つないショートソードを人に見られたら良くない気がする。ま

さか「スライム退治の達人なので得物を傷めませんでした」で納得してくれる人はいないだろう。またダキアさんに怒鳴られたら、今度こそ泣く自信がある。
と、いうわけでスライム君の溶解力がどれほどのものか確かめてみる事にした。
インベントリから捨てずにしまってあった串を取り出して、コア目がけて突き刺す。
キンコンとチャイムのような音が聞こえてきて、スライムが一瞬ぶるりと震えると、ゲル状の部分がコアから剥がれ落ちる。何、今の音？　それにスライムが……
「ひょっとして死んじゃった？」
［チャイム音はクリティカルが発生した時に鳴ります。ミナにしか聞こえません。状況を解説すると、クリティカルが発生してスライムのウィークポイントに命中。一撃で倒した事になります］
そうなんだ。クリティカルって簡単に出るのかな？
［クリティカルの発生率は幸運に関わってきます。ミナの場合、幸運が規格外の数値になっているので必ずクリティカルが発生します］
なるほど、それで軽く刺しただけで倒せたんだね。コアを手に取って見ると、串で刺した小さな穴が空いているだけだった。
これを持っていけば買い取ってくれるんだ。串の方はというと、刺した部分がグズグ

ズになって崩れてしまった。コアから外れたゲルの方は、すでに溶解力をなくしているみたいで、串で刺しても溶けたりしない。これなら何とかなりそうだね。

コアをアイテムボックスに入れて、周りを見回し手頃な棒を拾い上げる。

ショートソードで先端を尖らせてお手製ショートスピアの完成！　と、またキンコンとチャイム音が聞こえてきた。今度は何だろう？

「技能木工を習得しました。技能は教えてもらう事で得られますが、ごく稀に自然習得する事があります」

なるほど。これも幸運の効果なんだね。幸運って凄く便利だ！

さて、スライムを探して試し突きする事に。しっかり狙ってコアを突く。チャイムが頭の中で響き、スライムが身を震わせてコアが外れる。串よりも随分と太いお手製槍はまだまだ使えそう。

日が暮れるまでに何度もスライムをやっつけて、コアを十二個回収出来た。

暗くなる前に門をくぐり冒険者ギルドへ。相変わらず受付には列が出来ている。

冒険者って結構多いんだね。誰でもなれるからかな？　私はさっきのお兄さんの列に並んだ。

「こんばんは。早速森に行ってきたのかい？」

「はい。スライムのコアを持ってきました！」

「お疲れ様。じゃあここに出してもらっていいかな？」

相変わらず優しい笑顔で受け答えしてくれる。話しやすくて何だか落ち着く。

「はい！」

アイテムボックスから十二個のコアを全部出して置いた。

「っ⁉」

お兄さんは身を乗り出してコアをまじまじと見ている。何か凄く驚いているんだけど。

「ミナさんっ！　このコアはどうやって獲ってきたのかな？」

「え、落ちていた木を使ってコアを突いたんですけど、何かまずかったですか？」

「いや、その方法がスライム退治の最適解ではあるのだけどね、普通は大きな穴が空いたり、割れたりするはずなんだよ。完全な球体で持ち込まれる事なんて殆どないんだ」

えぇ、でも軽く小突いたら死んじゃったよ？　全力で突き刺す必要なんてなかったんだけど。

「軽く突いたら倒せちゃったんですけど」

「一突きで？」

「はい。一突きでした」

「そ、そうなんだ。ええと、一応説明するんだけど、コアにはね、見た目じゃわからないけどウィークポイントがあるらしいんだ。そこを突くとほんの少しの力でもスライムは死ぬ。でも狙ってそこが突けないから何回も攻撃したり、勢い良く突いたりで丸ごと破壊してしまうんだよ」

「壊しちゃった場合でも買い取ってもらえるんですか？」

「うん。スライムのコアは魔力の蓄積効率が凄くいいからね。魔晶石の代わりになるし、割れてても買い取れるよ。小さかったり傷がついていたりする分、安くなってしまうけどね」

　そうなんだ。魔晶石が何かはわからないけど、私が持ち込んだコアは結構いい感じなんじゃないかな？

「それでその、このコアはいくらくらいになりますか？」

「それなんだけどね、ちょっと確認をとってきてもいいかな？」

「はい。ここで待っていればいいですか？」

「うん。すぐに戻ってくるから、ここで待っていて！」

　そう言うとお兄さんはコアを一つ持って急ぎ足で奥へ引っ込み、すぐに戻ってきた。

「お待たせ！　ほぼ無傷のコアは珍しいからね、一つ二万レクスで買い取らせてもらうよ」

「そ、そんなに高く買い取ってくれるんですか？」

「うん。ギルドマスターに確認をとってきたから間違いないよ。はい、お金だよ。中を確認してね」

　確かに二十四万レクスある。半日どころか数時間で二十四万も稼いじゃったよ。冒険者って儲かるんだなぁ。

「一応言っておくけど、壊れたコアだと、一つ二千レクスくらいだからね」

　十倍⁉

「やっぱり貰いすぎじゃないですか？」

「いや、このサイズならこれで適正だよ。あと、これはギルドマスターからのお願いなんだけど、しばらくはスライム退治を継続してほしいんだ」

　ちょっと申し訳なさそうに言われた。お兄さんには親切にしてもらっているし断る理由はない。

「はい。大丈夫ですよ。明日も森に行ってきます」

　どの道、やれる仕事はスライム退治か薬草採取しかないからね。

「良かった！　じゃあ、明日もよろしくね」

「はい！」

こうして私の初仕事は大成功で終了した。

冒険者ギルドを出て穴熊亭へ。食堂はお客さんでいっぱいだった。

給仕をしている女の人が奥さんらしい。少しふっくらした元気そうな人だ。

挨拶をすると「亭主から聞いてるよ！　すまないけど今席が空いてないんだ。少ししたら空くと思うから待っててもらえるかい？」とのこと。

ここで待っているのも邪魔になりそうなので、一度自室へ戻る事にした。

装備を外してベッドに腰かける。

「そういえばレベルってどうなったかな？　経験値とかが見えればいいのだけど」

ステータスの事をイメージしたら目の前に表示が現れた。

レベルが二つも上がっている！　スライム十二匹で二レベルアップって、随分と経験値が高いのかな？　経験値は表示されてないからわからないけどね。

あと職業が冒険者になって、クラスがノービスになっている。ヘルプで確認したけど、ノービスっていうのは専門的な能力に特化する前のクラスらしい。レベル五でクラスが変わり、初めに選べるのは、ウォリアー、ファイター、スカウト、プリースト、ソーサ

ラー、シャーマンの六種類。

ウォリアーは重戦士、ファイターは軽戦士、スカウトは索敵や罠の解除とかが出来る。プリーストは回復魔法使い、ソーサラーは魔術師、シャーマンは精霊使い。

魔法ってどうやって覚えるのかな？　と考えたらすぐにヘルプさんが教えてくれた。魔法職の場合はクラスが変わった時に必ず一つは覚えるそうで、あとは人に教えてもらうかレベルアップ毎に増えていくらしい。

ただ、精霊魔法は精霊と契約しないといけなくて、誰でも使えるものではないそうだ。

私は何になればいいかなぁ。筋力十四、耐久力十四、敏捷性十六、知力十六、魅力六十二、幸運は振り切れているので変わらず。ステータスの伸び方を見ると、スカウトか魔法を使うクラスかな？

この先も一人で行くならスカウトなんかいい気がする。

次に、生命力、精神力、気力について。こちらも順当に三十七、三十八、三十九と増えている。

そういえば武技だっけ？　これも魔法と同じで、戦闘職系の人が、クラスが変わった時に習得するものだそう。でも、魔法も武技もごくたまに自然習得する事があるのだとか。そのへんは技能と同じなんだね。

あと、技能欄に工作レベル一と槍術レベル一が追加されている。
槍術は先を尖らせた棒を槍のように扱っていたから身についたんだろうね。
こんな簡単に技能を習得していいのかな？　間違いなく幸運六万五千五百三十五のおかげだよね。女神様に感謝だよ。お祈りとかした方がいいのかな？
明日もスライム退治だ。同時進行で薬草も探してみよう。
食堂が空いてきたみたいで、奥さんが呼びに来た。
「待たせて悪かったね。サービスするからいっぱいお食べよ」
「ありがとうございます！」
そうして運ばれてきた料理は超大盛で、サラダにシチュー、ステーキまである。パンはバスケット一杯持ってきてくれた。
「食べきれなければ残していいよ！　何なら明日のお弁当にしてあげようか？」
「いいんですか？　お金を払います」
「お代はいいよ。その代わり空いた時間で森の食材を採ってきておくれよ」
「わかりました！　明日は何か採ってきますね」
おじさんにも言われていたし、明日はキノコも探してみよう。ではでは、いただきます！

シチューは濃厚で具沢山！　ステーキも柔らかくてとってもジューシー！　かけてあるソースが甘辛くてすっごく良く合う。サラダも新鮮でドレッシングをかけて食べたら本当に美味しい！　ほんのりとした優しい酸味がいいアクセントになっている。パンも焼きたてのフカフカだ。
ごはんが美味しいと、自然と笑顔になっちゃう。
「そんなに美味いか？」
厨房からおじさんがこちらを覗いている。
「はい！　とっても美味しいです！」
おじさんは「沢山食べて大きくなれよ！」と言って、サッと引っ込んでしまう。でも、ちょっと嬉しそうだった。ごちそう様でした！
お湯をお願いし自室に戻って体を拭き、着替えてベッドに入る。明日は洗濯とかをしてから森へ出かけよう。

二日目の朝。随分と早起きをしてしまった。軽くストレッチをしてからベッドを出る。とりあえず洗濯をしよう。宿屋の裏庭に井戸があり、側にタライもある。自由に使っていいらしい。

石鹸をつけて昨日着ていた服を洗い、部屋に干す。手洗いって大変なんだなぁ。

そうこうしているうちに朝食が出来上がり、食堂でいただく。朝はスープにパンとサラダだ。アッサリめで食べやすかった。そういえばこの世界の食文化って結構良い気がする。ファンタジーな世界って調味料が貴重品で、味付けといえば塩のみ！　みたいな感じかと思っていたけど、そんな事はない。昨日の食事には調味料が沢山使われていたし、食べにくいものは全くなかった。

意外と住みやすい世界なんじゃないかな？

奥さんからお弁当を貰い、今日も元気に狩りへ出発！　門で衛兵のおじさんに挨拶をして、いざ森へ。今日はショートソードでもスライムを突いてみよう。

早速発見。ゆっくりと近付いてコアを軽く一突きし、コア一つゲット。やっぱり簡単だね。

そうそう、今日は薬草採取とキノコ採取もやるんだった。薬草については、この森には結構な種類が自生しているらしく、どれを持っていっても適正な価格で買い取ってくれるそう。

ここで役に立つのは鑑定だろう。葉っぱの形がそれっぽい草を見つけたら鑑定をしてみて、当たりなら採取って流れでいけそう。とりあえずやってみた。

【ディペン草】品質B。傷薬の材料。葉と茎は塗り薬に、煎じた根は飲み薬になる。

おお！　鑑定出来た！　説明も細かいし、品質とかもわかるんだ。そういえば鑑定ってどれくらいの距離まで出来るんだろう……？　試してみようかな。周りを見回すように鑑定を使ってみる。

【ディペン草　C】【ディペン草　B】【ディペン草　A】【ディポイ草　A】【ディポイ草　B】【ディペン草　B】【ディパラ草　B】【ディペン草　B】

うわっ、約五十メートルの範囲にある薬草が全部見える。情報量が多すぎてクラクラしてきた。

複数を見た時は名前と品質だけが表示され、一つを注視すると説明が現れるみたいだ。

とりあえず品質がAのものを採取する。全部採ってしまうと生えてこないかもしれないし、品質Cの草なんてまだ小さい。成長したら品質も良くなるに違いない。

ディペン草は丸ごと引っこ抜く。毒消しのディポイ草は根のみ使うので引っこ抜いて根だけをアイテムボックスへ。ディパラ草は痺れを取るのに使い、こちらは若芽が一番薬効が強いそう。若芽だけを摘む。ディペン草は十株、ディポイ草は八本、ディパラ草は四枚採取出来た。

薬草は結構手に入ったけど、キノコは見当たらない。もう少し奥へ行ってみようかな。

そうして森の奥へ進みながら、見つけたスライムを倒していく。これでコアは十個目。

木々の間隔が段々と狭くなり、茂(しげ)みも増えてきた。日の光が遮(さえぎ)られて薄暗く、ちょっと不気味な感じがする。そろそろキノコが見つからないかな？

キョロキョロと見回しつつ慎重に歩いていると、キンコンとチャイム音が聞こえてきた。

【ピエリ茸】品質B。香りが良く、焼いても煮込んでも美味(おい)しい。

あった！　とりあえず採取しちゃおう。形はシイタケに似ていて、マツタケっぽい匂いがする。他にもないかな？　っと、もう少し奥に沢山生(は)えているところがあるみたい。よし！　品質の良いものから採っていこう。夢中で採り続けて二十本ほどアイテムボックスに放り込んだ。

おじさんと奥さんに渡すものはバッチリ！　その時、再びチャイム音が聞こえてくる。どうやら幸運が発動した時にもチャイムが鳴るようだ。もしかしてまだ何かあるのかな？　周りを見回していると木の陰に何か光るものを見つけた。そーっと近付いて見たら、虹色に光る花が一輪咲いていた。

【エリクル草】品質S。森の中にごく稀(まれ)に咲く草花。通常は夜に花をつけるが、日中に咲いた花は万病に効く薬になる。

凄いの見つけちゃった。とりあえず採取してインベントリに。

そろそろお昼になるし、ここで休憩にしよう。丁度倒れた木があったのでそこに腰かけて、お弁当を取り出す。半分に切ったパンにサラダとお肉が挟んである、サンドイッチみたいなハンバーガーみたいな食べ物が四つも入っていた。美味(おい)しそうな匂いに堪(たま)らずパクついてしまう。

ソースが辛めでクセになりそう！　でも一つで満腹だよ。残りはインベントリに入れておこう。

お腹いっぱいになって少し食休みをと思っていた時、突然それはやってきた。

ヒュンッと何かが私の顔の近くをかすめていく。振り返ると後ろの木に矢が刺さっていた。

慌てて木の後ろに隠れる。何⁉　私が狙われているの？

パニックになりながら矢の飛んできた方をコッソリと覗いてみた。

茂(しげ)みの向こう側、五十メートルほど先に小さな影がいくつかある。子供？　そんなわけない。きっと人型の魔物だ。それらはこちらに向かって進んでくる。

多分ゴブリンだ。緑色の肌、身長は百三十センチくらい、ボロボロの剣や棍棒(こんぼう)を手にしている。数は五。見えないところにもっといるかもしれない。

えぇ……どうしよう……鞄は倒木のところに置いたままで、ショートソードも座るのに邪魔だと思って鞄の横に置いちゃっている。

完全に油断していた。ここは森で魔物もいるんだ。逃げなきゃ――殺される!!

ゴブリンって人を食べるのかな？　嫌！　絶対嫌だ！　近くへ来る前に走って逃げよう！

ゴブリン達との距離は約二十メートル。まだ逃げ切れるだろう。でも矢を撃たれたら？

そういえば、弓を持っているゴブリンがいない。まさか回り込まれていたりしないよね？

逃げようと思っていたのに、考えたら足が動かなくなってしまう。

怖い……誰か助けて……!!

「矢は当たっていない。油断するなよ」

「奴らの仲間じゃないのか？　始末しなければ奴らに逃げた方向を教えるはずだ」

え？　人間の言葉じゃないけど言葉がわかる!?　それなら、一か八か！

「あ、あのっ！　戦うつもりはありません！　誰にも言わないから見逃してくださいっ！」

意識して話そうとしたら、同じ言語で話す事が出来た。

「俺達の言葉がわかるのか？　顔を見せろ」

恐る恐る顔を出す。五人のゴブリンは武器を構えたままだ。衣服がボロボロで傷だらけなのが痛々しい。

「やっぱり人間じゃないか、奴らが来る。早く殺すぞ」

武器をこちらに向けてくるゴブリン達。

「ま、待ってください！　追っ手は人間ですか？　私が誤魔化しますから隠れてください」

「本当か……？　仕方ない、こいつに任せてみよう」

「おかしな事をしたらお前を殺すからな」

ゴブリン達は私の側の茂みに隠れた。

私は木に刺さったままの矢を引き抜いて茂みに隠してから、倒木に戻り腰かける。

間もなくゴブリン達が来た方向から二人の男性が現れた。一人は革の鎧に長剣、もう一人は金属の鎧に槍を持っている。

「お、ルーキーのお嬢ちゃんじゃないか。こんな奥まで来て大丈夫か？」

金属鎧に槍を持った人に聞かれた。茶色の短髪で厳つい雰囲気がいかにも冒険者って感じ。

「ほぉ。この子が噂の」
もう一人の革鎧の人は黒色のバケットハットを被り、無精ひげを生やしていた。
噂って？
「こんにちは。宿屋のおじさん達にキノコを採って帰ろうと探していたらここまで来ちゃいました」
あははと笑って答える。
「俺達はゴブリンを追いかけているんだが、こちらには来ていないか？」
帽子の人が周りを鋭い目つきで見回しながら言う。
「来ていませんよ。この辺りってゴブリンが出るんですか？」
「い、いつもはもっと奥にいるんだが、今日はこの辺りで遭遇してな、逃げ足が速くて追いかけているところなんだ」
短髪の人が少し詰まりつつも丁寧に教えてくれた。話が苦手なのかな？
「そうなんですか」
「その、なんだ。ゴブリンに遭ったら危険だ。俺達が安全な場所まで連れていってやろう」
短髪の人が私を見下ろして言ってくる。表情が何だか引きつっているけど、私を怖がらせないように笑顔を作ろうとしているのだろう。気を遣ってくれるいい人なんだね。

ここでこの人達に保護してもらえばゴブリンから逃れられるかもしれない。でも私は彼らに何とかすると言ってしまった。もし裏切ったように見えたら私もろとも二人も殺される危険がある。
「いえ、お兄さん達のお仕事の邪魔はしたくありませんから。一人で戻れるので大丈夫ですよ」
そう言って柔らかく笑ってみせると帽子の人はニヤリと笑みを浮かべ、短髪の人はそっぽを向いた。顔が赤いけど、どうかしたのかな？
「そ、そうか。じゃあ俺達は行くからな。なるべく早く森を出るんだぞ」
短髪の人は残念そうに言う。
「はい。心配してくれてありがとうございます。お仕事頑張ってください」
「おう！　またな」
そう言って森の奥の方へ戻っていく二人。
「おい。お前、どういうつもりだ？」
私の危機は去っていない……茂みからぞろぞろとゴブリンが出てきた。
「どういうも何も、約束を守っただけですよ」
努めて冷静に、受け答えする。

「この後、俺達に殺されるとは考えなかったのか？」
殺されるという言葉に背筋が凍りついた。足が震える。でも何とか平静を装って言う。
「いやその、言葉が通じるなら何とかなるかなって。平和的に、みたいな？」
「へいわてきに？　どういう意味だ？」
あー、ゴブリン語にはない単語なのかな。
「争わない、戦わない、話し合いで解決するって事ですよ」
「信用出来ない。人は俺達を見るとすぐに襲ってくる」
一人のゴブリンが私を睨みつけながら言ってくる。
「えっと、少なくとも私は意味もなく皆さんを傷つけたりしません」
「どうだかな。不利だからそう言うんじゃないのか？」
「でも約束は守ったぞ」
口々に言われる中、小さく深呼吸をして話を進める。
「皆さんはいつもはこの辺りにいないそうじゃないですか。そんなに傷だらけになってまで、どうしてここにいるんですか？」
話題を私の事から逸らそう。無事に解放される糸口が見つかるかもしれない。
「俺達は薬草を探しに来た。虹色の花が咲いている変わった草だ」

さっき採った薬草だ！
「私、それ持っています！」
これで交渉出来るかも！
「何⁉　どこに持っている、見せてみろ」
「これですよね？」
インベントリからエリクル草を取り出して差し出す。
「おお！　ホントに持っていた！　虹草だ！」
「たまたま見つけただけなので、使ってください」
「本当にいいのか？」
「これを探していたという事は、重い病気の方がいるんですよね？　私は特に必要じゃないので」
「ありがとう！」
ゴブリンの一人がエリクル草を受け取る。
「いえいえ、あっそうだ。傷薬になる薬草も持っていますので、良かったらどうぞ」
ディペン草をインベントリから五株取り出して他のゴブリンに手渡した。
「何から何まですまない」

頭を下げるゴブリン達。こっちの世界の魔物にもお辞儀っていう文化はあるんだね。
「いえいえ！　それでその、私は帰ってもいいでしょうか？」
「俺達は恩あるものに危害を加えたりはしない」
と、頭上の木の葉がガサガサと音を立て、私の後ろに何かが着地した。
「この人間を殺さなくて済んだな」
弓を持ったゴブリンだ。私を上から狙っていたのだろう。もしあの二人に助けを求めていたら頭に矢を受けて死んでいたかもしれない。
「じゃあ私は行きますね。まだあの二人が近くにいるかもしれません。お気をつけて」
「本当に助かった」
「お前、いい奴」
それぞれお礼を言いながら森に帰っていく。
「俺達の長が毒を持ったデカいスライムにやられたんだ。何とか追い払ったんだが毒が強くて普通の薬草では治せなかった。お前も気をつけろ」
弓を持ったゴブリンはそう言うと茂みに消えていった。
鞄とショートソードを手にして、私も足早に森の奥から抜け出す。
メチャクチャ怖かったよ～。どうにか無事に切り抜けられて良かった。

ゴブリンの言葉がわかった事、相手が話のわかるゴブリンだった事、エリクル草を持っていた事、いくつもの偶然が重なって助かったんだ。
次からは油断しないように気をつけよう。帰りに森の入り口付近でスライムを十匹やっつけて、品質の良いディペン草を五株採取したところで、早めに街へ戻る事にした。
冒険者ギルドはまだ人が少なくて、受付にはそんなに人が並んでいなかった。
「お疲れ様。森はどうだった？」
昨日のお兄さんが優しく話しかけてくれる。それだけでちょっと涙ぐんでしまった。
「ちょっ！　何かあったの⁉」
「い、いえ！　薬草採取をしていたら迷ってしまって、帰ってこられて良かったって……」
「怪我はしてない？　良かった」
お兄さんは本当に心配している様子だ。あんまり人に心配をかけちゃいけないな。
気を取り直し、買い取りをお願いしますと、スライムコア二十個と薬草各種をカウンターに並べる。
「おおっ！　コアをこんなに。薬草も処理がしっかりしてあるね」
お兄さんは手早くコアと薬草の品質を確認していく。

立ち読みサンプルはここまで